

テーマ

身近な自然の少し前の姿って？

適用
分野

環境教育、地域史研究



研究
名称

古地図からみる過去の植生景観の復元

氏名
所属

鳴海邦匡 教授
文学部 歴史文化学科

内容

●特徴

古地図の読解を通し、近世－近代にかけての身近な自然景観の変化をみる。

●研究内容

この企画の目的は、身近な自然を素材に、近世以降の植生景観の変化を辿るものである。それは、身近な自然を保全しようとする主張の背景の「里山が荒廃する」や「伝統的な景観が失われる」といった見方を、問い直す視点を養うためである。

実は身近にある里山や鎮守の森の植生景観は100年程前の様子を見るだけでも今と異なることが分かる。かつての里山には草山が広く展開していたし、鎮守の森にも二次植生であるアカマツ林が多かった。それは人々が林野資源を長く利用してきた影響である。

例えば、神戸市民にとって馴染み深い六甲山でも同じ現象を確認できる。昔の六甲山山頂付近には今と異なって草地的な景観が広がっており、麓の農民らが肥料や飼料などの資源を採る場として利用していた。

こうした変化する植生景観を知ることは、環境教育を進めるうえで重要な視点となると考える。

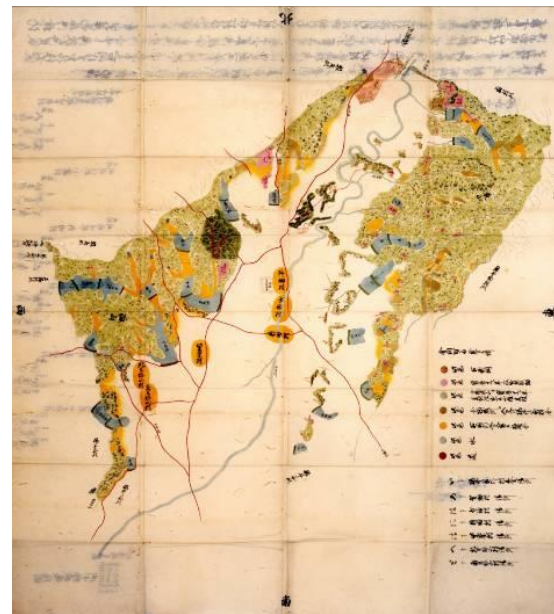
●参考文献

鳴海邦匡（2021）「六甲山の歴史：植生景観の変遷」『大学的神戸ガイド』昭和堂、25-43頁。

●参考サイト

空前の古地図ブーム到来！？古地図を手にした街の魅力を発見！（甲南PLANET）

<https://www.konan-u.ac.jp/konan-planet/academic/kotizu/>



キーワード

景観史、古地図、地形図、アカマツ、二次植生、常緑広葉樹、草山、六甲山

連携方法

■ 講演 ■ 研修 ■ 研究相談 ■ 学術調査 ■ コメント ■ 共同研究